

アレルギーっ子家族に 寄り添える人でありたい

今年も女性いきいき大賞の募集が始まりました。今回は、第16回女性いきいき大賞でコープやまぐち奨励賞を受賞された「アレルギーっ子の会 ぼれぼれ」の代表 田辺理恵さんにお話を伺いました。

アレルギーっ子の会
ぼれぼれ代表
田辺理恵さん



たくさんの人に
伝わって欲しい

アレルギーっ子の会

ぼれぼれ(山口市)

食物アレルギーの子どもを持つお母さんが主体となつて、おしゃべり会や防災イベントの企画・開催などの活動を行っています。「ボレボレ」とは、スワヒリ語で「ゆっくり」という意味。アレルギーについて理解してもらえようという活動をめざしています。

悩みを共有できる場の貴重さ

周南市で生まれ育ち、結婚後に山陽小野田市へと移り住んだという田辺さん。2番目の娘さんが生まれて少し経った頃、ミルクを飲ませると体が赤くなったり、湿疹が出たりするようになったといいます。「長女の時はなにもなかったんで、初めは少身体調が悪いのかな?くらいに考えていました。けれど、その症状は改善されずに、7か月頃の検査で、卵と乳のアレルギーが発覚しました」。当時の子育てを振り返り、ちよつとした誤食が命にも関わる状況で、神経質になっていたと話す田辺さん。ア

ルギーっ子の会 ぼれぼれ(以下、ぼれぼれ)の活動に参加するようになったのは、娘さんが小学1年生になった頃だったそうです。「存在は知っていたんですが、遠方だったこともあつてなかなか足を運べずにいました。1度見学に行った際、集まったお母さんたちと話してみても、心が軽くなったことを覚えています」。それから毎月おしゃべり会に参加。

「SNSなども発達していない時代で、同じ悩みを持つ方と交流できる機会はとても貴重でした」。



▲米粉のお好み焼き作りとポリ袋クッキングに挑戦

アレルギーっ子の防災にも注力

ぼれぼれの代表となつたのは8年ほど前のこと。「前の代表の方が県外に転居されることになり、会の存続のためにも思つて引き受けました」。月に1回のおしゃべり会は、悩みを共有できる場として、コロナ禍

でもオンラインで開催するなど工夫を凝らしながら継続されています。また、東日本大震災や西日本豪雨をきっかけにアレルギーっ子の防災へも目を向けられるようになった田辺さん。「実際に被災された方から、避難所ではカップ麺や菓子パンなどが配られるけど、アレルギーを持っていると食べられないものも多くあつて苦労したという話を聞き、事前に備えることの大事さを実感しました。地域の有志と協力して避難所でのアレルギーに配慮した炊き出しの仕方をまとめた冊子を作成したり、子どもたちと防災クッキングをしたり、周囲の方に知ってもらうための活動を続けています」。

アレルギーの有無に関係なく一緒に考えられるように

女性いきいき大賞の受賞の知らせを受けたのは、昨年2月。「賞を頂いたことはもちろんですが、コープさんを通じて、ぼれ

ぼれの活動を組合員さんに知ってもらえる機会になつたことがなにより嬉しかったです。アレルギーのことを当事者でない方も一緒に考えてくださることが、活動をしていて良かったなと思えるところですね。今後も、アレルギーっ子やご家族に寄り添いながら、アレルギーの有無に関係なく、皆が一緒に考えられるような場所を作り、より広く、あらゆる立場の方にアレルギーについて理解してもらえるような活動をしていきたいと考えています」。



▲いきいき大賞 表彰式

まずはお気軽にご相談ください!!

お子さんのアレルギーでお悩みの方、活動に参加したい方下記のInstagramのDMよりご相談を受け付けています。



▲アレルギーっ子の会 ぼれぼれ Instagram

第17回女性いきいき大賞の募集については9ページをご覧ください。